



ISO 14001のご提案

～今だからこそ、環境への配慮を考えるISO 14001～

『ISO 14001』とは…

製品の製造やサービスの提供など、自社の活動に伴う環境への負荷を最小限にするように定めた仕組みです。

EMS : Environmental Management System

環境

マネジメント

システム

※環境への負荷を低減させるよう、組織／企業の体制を「継続的」に改善するシステム

ISOは、人材と組織（会社）を成長させ、
経営のステージアップ（成功）に導く取組みです。

1. 環境への配慮の必要性

■ 環境マネジメントシステムの狙い（経済のグリーン化）

- ・ 有害な環境影響を防止、緩和し、環境を保護する
- ・ 組織を取り巻く環境の状態から引き起こされる、組織にとっての有害な影響を緩和する
- ・ 法的要求事項、その他の要求事項などの順守を確実にする
- ・ 環境パフォーマンスを向上させる
- ・ ライフサイクルを考慮した製品、サービスの開発・提供を実現する
- ・ 市場における組織の競争力を強化し、かつ、環境にも貢献し、財務上、運用上のメリットを実現する

■ 事業者による環境負荷の軽減

環境影響を与える可能性のある環境側面は多岐に及びます。全ての環境側面を管理するとなると、かなりの労力と費用がかかり、企業活動からすると合理的ではありません。

自社の環境側面を調査した結果、環境影響の要因になり得るものとして、管理すべきもの、改善すべきものを「著しい環境側面」として決定します。

2. 事業の課題を特定する

■ リスク及び機会

【建設業におけるリスク及び機会の例】

外部の課題 内部の課題	利害関係者 ニーズ及び期待	リスク及び機会	取組みの計画	QMSへの展開 有効性評価の方法
異常気象の影響による工期の遅れ	工期の順守(顧客)	工事評価点が下がり、今後の入札案件に悪影響が出る(リスク)	工程の進捗管理を徹底する。バックアップ体制を整える。	工程進捗管理及びバックアップ要否確認のためのコミュニケーションを設定する。
機器または資材の納入の遅れ	工期の順守(顧客)	顧客から損害金を請求される。(リスク)	機器、資材の発注管理及び仕入先の特性に基づく管理を徹底する。	8.4購買において発注管理にチェック機能を盛り込み、仕入先管理に業者特性チェック項目を盛り込む。
顧客の検査基準を満たさない施工	検査基準通りの施工(顧客)	顧客への引き渡しができず、手直しが発生する。(リスク)	協力業者を含めて作業員へ検査基準を周知する。	7.4コミュニケーションに検査基準周知等を盛り込み運用する。
無資格者による現場作業または管理	法規制を満たした作業の徹底(顧客)	無資格者作業または管理の発覚による営業停止等の行政処分を受ける。(リスク)	協力会社を含めて作業員の資格管理を徹底する。	7.2力量において資格管理を徹底することと、資格取得を奨励するための取組みを行う。
協力会社が少なく、施工体制が組めない	2020年に向けてインフラ整備のための工事が多い	多くの工事を受注し、売り上げを伸ばす機会	協力会社を発掘する	6.2品質目標へ組込む協力会社の発掘件数を目標に設定し、目標の進捗管理により評価する。
工事発注物件の動向が読めない	—	受注件数が著しく減少する可能性がある	発注者の問題であり計画不可能	—

3. ISO 14001が生まれた背景と次の改訂

■環境意識の高まりと国際的な規制と合意

20世紀後半から、地球温暖化や環境お延などの環境問題が国際的に注目されるようになり、環境保護に関する意識が高まりました。それを受けて1970年代から1990年代にかけて、環境保護に関する国際的な規制や合意(例：リオ地球サミット、京都議定書など)が増加し、企業にも環境配慮が求められるようになりました。

企業の社会的責任（CSR）や持続可能な発展の概念が広がり、企業活動が環境に与える影響を管理する必要性が認識され、環境管理の基準を国際的に統一することで、各国の企業が同じ基準で環境保護に取り組むことが促進し、貿易や企業間の信頼性を向上させる目的があります。

- ISO 14001：1996年 初版発行
： 2004年版、2015年版改訂

ISO 14001の次期改訂は、2025年の秋に予定されています。

今回の改訂は「軽微な改訂」とされており、新しい要求事項の追加は予想されていませんが、主に附属書Aの情報に変更が加えられる予定です。気候変動や資源の希少性、再生可能エネルギーの利用、循環経済の推進などの最近の環境問題への対応が強調される予定です



4. 『マネジメントシステム』とは

■ 『マネジメントシステム』

品質管理や環境保護、食品安全等の各分野のISO規格の要求事項に従って会社を運営するためのルールを作り（「規定」、「手順」等）、そのルールを運用するための役割、責任及び権限の体制を整えるものです。各分野のISO規格の目的（目標）を達成するために組織を指揮・管理するための『仕組み』がマネジメントシステムであります。

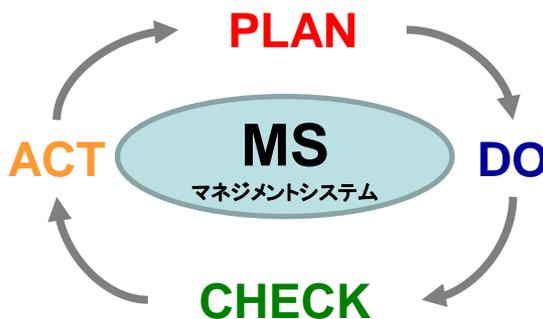
■ 『マネジメントシステム』の運用

マネジメントシステムの『仕組み』は、下図の構造を採用しています。決めた活動計画を運用し、見直し、改善していく『PDCA』に基づく運用を行い、レベルアップを行うことが求められています。



- 会社の現状を把握する
- 役割、責任及び権限等の体制を整備する
- リスクや機会への対応、目標達成のための活動を計画する

- 監視・測定（点検）によって得られた情報をもとに現状・体制・活動計画の見直し、改善を行う



- 人、物、情報等の資源を管理する
- 教育・訓練の実施、意識向上によって人のレベルアップを行う
- ルールの明確化、活動の確実化のための文書・記録を管理する
- 日常業務において決めた活動計画を実践する

- 実践した活動を監視・測定（点検）する

5. 『ISO 14001』 で取組むべきポイント

■環境パフォーマンスの向上 (ISO規格8.1)

持続可能な資源利用と廃棄物削減を目指し、環境への影響を最小限に抑える取り組みを行う。

■気候変動対策 (ISO規格6.1.2及び8.1)

温室効果ガス排出の削減目標を設定し、気候変動リスクに対応するための計画を策定する。

■循環型経済の推進 (ISO規格8.1)

リサイクルや再利用のプロセスを強化し、資源効率を高める。

■法令順守とリスク管理 (ISO規格6.1.3及び6.1.1)

環境法令を遵守し、環境リスクを評価・管理する体制を整備する。

■持続可能なサプライチェーン管理 (ISO規格8.1及び8.4)

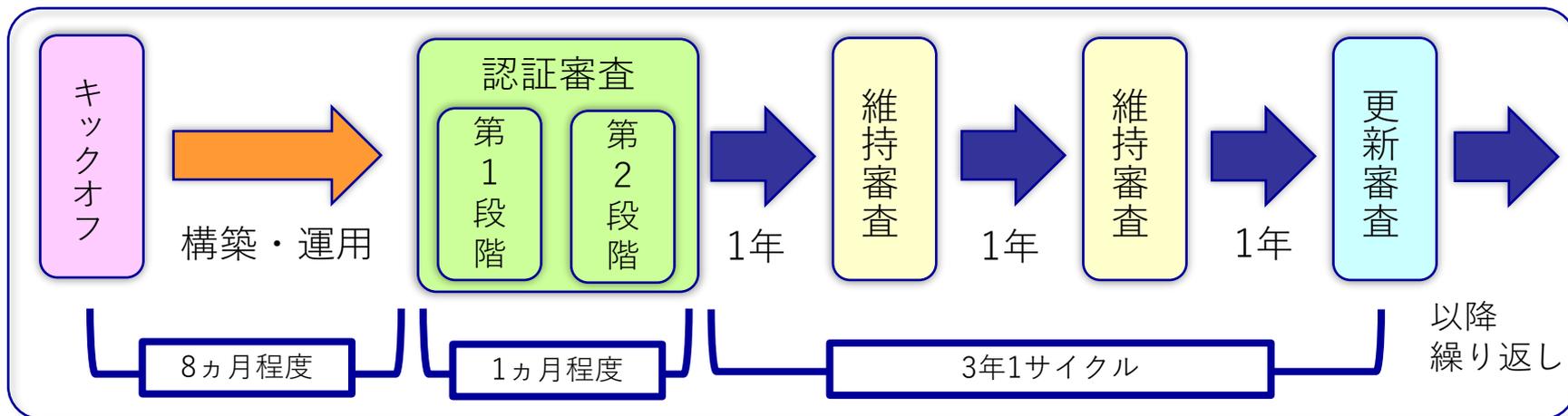
サプライチェーン全体での環境パフォーマンスを向上させ、持続可能な調達を確立する。



6. 認証取得までの流れと活動

	第1月	第2月	第3月	第4月	第5月	第6月	第7月	第8月	第9月
取組み流れ	キック オフ	構築		運用			審査対応		
	<ul style="list-style-type: none"> ① 認証範囲の決定 ② 体制決定 ③ 既存文書の整理 	<ul style="list-style-type: none"> ④ 文書作成 	<ul style="list-style-type: none"> ④ 文書作成 ⑤ 審査機関の選定 	<ul style="list-style-type: none"> ⑥ 社内展開 ⑦ 運用開始 		<ul style="list-style-type: none"> ⑧ 内部監査の実施 ⑨ マネジメントレビュー 	<ul style="list-style-type: none"> ⑩ 審査受審 ⑪ 審査対応 	<ul style="list-style-type: none"> ⑫ 審査受審 ⑬ 審査対応 	ISO14001 認証取得
コンサルティング実施事項	<ul style="list-style-type: none"> ① 認証範囲の特定 ② 業務・手順等の洗出し 	<ul style="list-style-type: none"> ③ 文書構築 		<ul style="list-style-type: none"> ④ 運用開始 	<ul style="list-style-type: none"> ⑤ 教育研修 	<ul style="list-style-type: none"> ⑥ 内部監査 ⑦ 審査準備 	<ul style="list-style-type: none"> ⑧ 第1段階審査対応 	<ul style="list-style-type: none"> ⑨ 第2段階審査対応 	

7. 審査



《認証審査》

ISO認証を取得するための審査です。構築したマネジメントシステムがISO規格の要求事項に適合していることを確認する『第1段階』と構築したマネジメントシステムと実態が適合していることを確認する『第2段階』で構成されます。（有効期間3年）

《維持審査》

ISO認証を維持するために1年または半年に1回、マネジメントシステムの運用状況を確認する審査です。一般的には1年に1回の維持審査を受けます。

《更新審査》

ISO認証を更新するための審査です。認証審査(第2段階)と同様の審査を行います。